

教科連携を通して読解力を高める児童の育成

－小5年国語科と社会科の教育課程での連携を通して－

美浜町立河和小学校 教諭 林 智子

はじめに

新学習指導要領では、知識、技能を活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力などの育成、言語活動の充実がうたわれている。国語科においては、第5・6学年の書くことにおいて、「引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと」とある。また、社会科においては、各学年の目標に「考えたことを表現する力」の育成が新たに規定された。これらは、まさしく読解力につながる部分である。ここでは、読解力を「文字だけではなく図表やグラフまで含めた資料の意味を読み取り、解釈し、自分の考えとして表現する力」ととらえる。この読解力を向上させるべく実践に取り組んだ。

19年度は6年生を担当し、国語科と社会科を連携して読解力の向上を目指し、実践を行った。社会科「国際連合のはたらきと日本人の役割」で環境問題について調べ、考え、話し合いを通じて自分の考えを深めていった。そして、国語科「自分の考えを発信しよう」では、自分たちの考えをまとめ、ブログを通して発信させた。この実践において、様々な資料を読み、考えていくことができたが、自分の考えを書くことでまとめ、自分の考えを分かりやすく表現することがおろそかになってしまった。そこで20年度は、昨年度の反省を基に、学習してきたことを生かして自分の考えを明らかにし、分かりやすく表現することを目指して実践に取り組んだ。

1 研究の目的

国語科と社会科の2教科を連携させて読解力を高めていくことを考えた。新しく単元を起こすのではなく、なるべく現在のカリキュラムの中で効果的に連携させて実践できることをねらい計画した。

読解力は、学習指導要領に基づき、各教科、総合的な学習の時間など、学校の教育活動全体の中で身に付けていくことが望まれる。教科などの枠を越えた共通理解と取組が大切である。

従来はともすると、国語科を中心に読解力の育成を考えてきたが、前述のように国語科だけでなく、他教科とも連携させながら読解力を身に付けさせていくことが有効だと考える。そこで、以下のような仮説を立てて読解力を高めていこうと考えた。

研究の仮説

単元の目標に沿って、国語科と社会科とを連携しながら様々な資料を読み、話し合いを通じて自分の考えを深め、自分の考えを分かりやすく表現していこうとすることで、児童の読解力は高められるであろう。

2 研究の方法

(1) 育てたい読解力

ア 図やグラフ、写真など様々な資料を目的に応じて読み取り、理解する力

イ 話し合いなどを通して、他の人の意見を参考にしながら自分の考えを深めていく力

ウ 資料を読んだ結果や、話し合ったことを生かして自分の考えを明確にし、分かりやすく表現する力

(2) 読解力育成のための手だて

ア 様々な資料を読む活動に慣れさせる。

イ 学習課題を明確にして資料を読ませ、話し合いを通して自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実させる。

ウ 理由や根拠をはっきりさせ、資料を利用しながら自分の考えを表現させる。

(3) 読解力育成のための教科連携

社会科では、図やグラフなど様々な資料を用いて学習する。5年生で扱う食料問題は、題材が児童にとって身近であり、自分の考えをもちやすいと思われる。また他の人の考えを聞いて参考にすることも比較的容易である。国語科ではインタビューについて学ぶ単元があり、社会科のこの単元と連携しやすいと考えた。また、自分で考えを深めた結果を分かりやすく表現するには、表現の仕方を学ぶ必要がある。同じく国語科でレポートの書き方について学ぶ単元があるため、これも生かせるのではないかと考えた。そこでこれらの単元で国語科と社会科を連携し、(5)のような指導計画に沿って実践し、読解力を高めようと考えた。

(4) 抽出児童について

抽出児童A	何事にも真摯 <small>しんし</small> に取り組み、学習に対する意欲もある。挙手はそれほど積極的ではないが、自分の考えはもっている。自分で調べたり友達の意見を聞いたりしながら自分の考えを深め、意欲的に考えを表現できるようにしたい。
抽出児童B	意欲はあるが、それが発言や行動に結び付くことは少ない。一連の学習の中で、興味をもって学習に取り組み、活動につなぐことができるようにしたい。

(5) 指導計画（平成20年6月 5年生34人） ※【 】は単元名

段階	時	社 会 科	時	国 語 科	育てたい 読解力
		学 習 活 動		学 習 活 動	
つ か む	1	【食料生産をささえる】 食料の生産地と消費地とを結ぶ運輸のはたらきについて調べる。			・資料から現在の運輸の様子や食料の輸出入の概要を理解する。
	2	主な食料の輸入先と輸入量について調べる。			
調 べ る	3	食料輸入の問題点について調べる。	1	【インタビュー名人になろう】 インタビューの目的について話し合う。	・テーマに沿ってインタビューをしたり、資料を調べたりする。
	4	これからの食料生産について調べる。	2	インタビューのよさと難しさを知る。	
			3	具体的に相手や目的を設定してインタビューの計画を立てる。	
			4	本番を想定しながら練習	

	5	これからの食料輸入はどうしていくべきか考える。		し、内容を改善する。	
	6	食料の輸入について話し合うために、資料を集める。			・資料を基にこれからの食料輸入について考える。
深める	7	河和小議会を開くための準備をする。			・話し合いを基に自分の考えを深める。
	8	食料の輸入について河和小議会を開く。			
まとめる				【調べたことを整理して書こう】	・自分で考えたことを、理由や根拠をはっきりさせながら分かりやすく表現する。
	1			課題の決め方や研究方法、レポートを書くことについての見通しをもつ。	
	2			話し合ったことを基にレポートを書く準備をする。	
	3			自分のテーマに沿ってレポートを書く。	
	4			完成したレポートを紹介し、感想を交流する。	

ア つかむ

学習していくに当たり、まず資料を読み取る時の基本として次のことを押さえる。

・資料のタイトル、出典、年、横軸、縦軸、内容を押さえる。(読み取りの基本①)
・個々の事実、全体の様子や傾向などを確実に読み取る。(読み取りの基本②)
・資料の内容を分析的に読み取り、解釈する。(読み取りの基本③)

そして、教科書に出ているグラフや図を基にして考え、食料の輸入や輸出について現在の状況を知り、日本の置かれている様子を理解させる。

イ 調べる

食料輸入の問題点や、これからの食料生産・食料輸入について調べていく。調べる手段としては、学校の図書館や町の図書館の資料(町の図書資料は、団体貸し出しとして学校で集団で利用できる)や、インターネットなどを利用したり、食にかかわる関係者に話を聞く機会をつくったりする。インターネットを利用する際には、前もってネチケット(ネットを使うときの注意点やネット使用で起こる問題点に関する注意)について指導しておく。

ウ 深める

これまでの学習を基に、同じ考えをもつ者同士でグループをつくる。そして、そのグループで話し合いに向けて準備をする。話し合いは全体で行う。食料の輸入についてこのまま輸入を進めるべきかどうかという点で考えていく。その際、なぜそう考えるのかという理由や根拠を明らかにさせておくことを大切にしたい。

基本的にはグループで考えさせ、それを基に個人で考えを深めさせていくようにする。

エ まとめ

話し合ったことを基にして、自分の考えをレポートとしてまとめる。国語科でレポートの書き方を学習し、その題材として社会科での学習の内容を取り上げるというスタイルである。集めた資料等を使いながら、分かりやすく自分の考えを表現させたい。

3 研究の内容

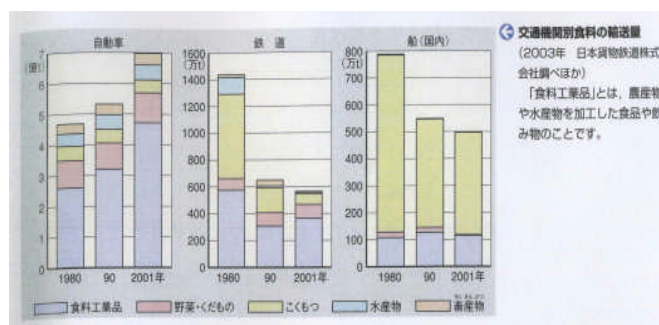
(1) 資料を読み、理解する（社会科第1～4時）

ア 資料を基に読み取る

これまでの学習でも、グラフをはじめとする資料を児童は目にしている。しかし、その見方はあいまいで、また、目を向けるべき事柄もしっかりと把握できていなかった。そこで、まずは同じ資料を基に読み取る時の基本を確認した。（資料1）

これは、教科書に載っているグラフである。初めに次の項目を確認した。（読み取りの基本①）

資料1 食料輸送量のグラフ（大阪書籍『小学社会5年上』平成17年）



項目	
タイトル	交通機関別食料の輸送量
出典	日本貨物鉄道株式会社調べ
年	2003年
横軸	年
縦軸	輸送量 (t)

ここでは、一つ一つの項目を無理なく確認することができた。ただ算数科と違い、横軸や縦軸の目盛りが均等になっていないという声から児童が出た。この場合、横軸の年は1980, 1990, ときて次は2001年になっている。また縦軸の輸送量は、鉄道と船は単位が万トンなのに自動車は億トンとなっている。社会科ではこういうグラフもあることを確認することができた。

次に読み取りの基本②として、全体の様子や傾向に注目させた。「自動車はだんだん量が増えているけど、鉄道と船はだんだん減っている」「鉄道は1980年から1990年の10年間で半分以下に量が減った」などの気づきがあった。

そこでさらに読み取りの基本③として、資料を解釈できるよう単位の違いや食料の内容に目を向けさせた。すると、次のような意見が出た。

- ・自動車は、鉄道や船と比べて輸送量が多い。
- ・船が輸送しているのは、ほとんどが穀物だ。
- ・自動車が輸送しているのは食料工業品が多いが、他にもいろいろと輸送している。
- ・他の交通機関で輸送しているものはないのかな。

ここではこのグラフを通して食料の輸送について次のことを話合いで確認した。

- ・食料の種類によって、適した輸送方法が選ばれているのではないかな。
- ・今の時代、今の生活からすると、自動車で輸送するのが一番都合がよいのではないかな。
- ・飛行機は使われていないのだろうか。

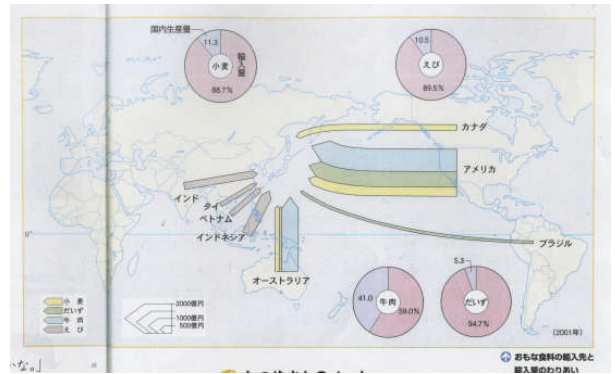
イ 資料を基に考える

一般的なグラフ資料に続き、地図を基にした図で読み取る学習をした。(資料2)

ここでは、資料の事実を読み取り、解釈し、考えることに重点をおいた。

「おもな食料の輸入先と輸入量のわりあい」の図では、えび、大豆、小麦については80%以上が輸入であることに驚きの声が上がった。また、アメリカをはじめとする世界各国から食料を輸入していることにも関心が寄せられた。児童AとBも図から読み取ったことを基に、それぞれ次のような感想を書いた。(資料3)

資料2 おもな食料の輸入先と輸入量のわりあいの図 (大阪書籍『小学社会5年上』)



資料3 児童A・Bの感想

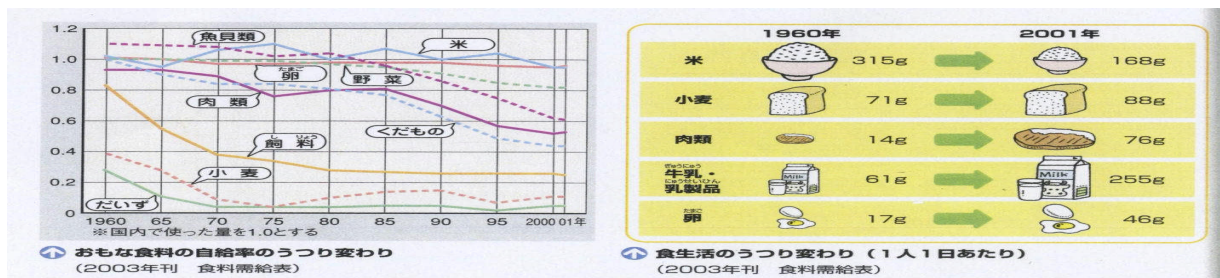
児童Aの感想	児童Bの感想
<p>日本の食料輸入が多いのは知っていたけど、80%をこえるぐらいほとんど輸入ばかりだとは思いませんでした。他の食料はどうなのかなと思います。</p>	<p>あまりにも輸入が多くておどろきました。小麦や大豆、えびはほとんど輸入でした。どうして日本にはないんだろうと思いました。</p>

その後、なぜこのように世界各国から輸入するようになったのか、どうして輸入量が増えたのかについて調べ、話し合った。そして、「小麦や大豆をたくさん使うから足りないんだ」、「国内の生産だけでは足りないから輸入するんだ」、という考えが出された。このように、児童は、数字や矢印で表されている図からいろいろなことを考えた。

ウ 資料を比べながら考える

国内生産だけでは足りない現状に気付いたため、ではどのくらい足りないのか、どんな様子なのかを調べた。国内の「おもな食料の自給率のうつり変わり」と「食生活のうつり変わり」という二つの資料を比べながら考えた。(資料4)

資料4 比較した2つの資料 (大阪書籍『小学社会5年上』平成17年)



- ・自給率の移り変わりのグラフは、縦軸の数字が食料が余っているか足りないかの基準になっているんだ。
- ・お米の自給率はだいたい1.0以上あるのに、食生活の移り変わりの表では、消費量が半分ぐらいに減っている。
- ・お米以外の消費量はすべて増えているのに、自給率はほとんど減っている。それで輸入食料が増えているのかな。

また、実際に私たちの周りにはある食料がどのくらい輸入食料でまかなわれているのかを知ることができる「料理自給率計算ソフト」がある。このソフトで日本食らしい献立である天ぷらうどんについて調べてみた。うどんの小麦、天ぷらのえび、つゆのしょうゆの原料である大豆等々、ほとんどが輸入された食料であるため、天ぷらうどんの実際の自給率は40%にも満たないことが明らかになったのである。(入力の仕方によっては数値が変わる場合もある)日本の食べ物というイメージがあった児童には、初めて知る現実だった。ここでは、ネットを使用する際の注意として、ビデオ教材や児童向けのパンフレットを利用しながら、ネチケットについても学習した。家庭で日ごろからインターネットを利用している児童もいるので、全員で改めて確認をした。

続いて、これほど日本にとって多い輸入についての問題点を考えた。ちょうど少し前に中国での餃子に関する話題もあり、新聞やニュースでの報道から農薬については知っている児童も多かった。また、養殖用の池を作るためマングローブが切り倒されている写真から、自然が壊されていることを知ることができた。計算ソフトや写真から、今の日本の食料は大変輸入が多いこと、また安全面だけでなく、他にも問題があることに気付いていった。

(2) 自分の考えを深めていく(社会科第5～8時・国語科「インタビュー名人になろう」)

これまでの学習を通し、「このまま輸入を続けていくほうがよい」か、それとも「国産に頼っていくほうがよい」か自分はどちらがよいかを選んだ。この時点ではクラス34人中、輸入派14人、国産派20人であった。児童Aは輸入を、児童Bは国産を選んだ。(資料5)

資料5 児童A・Bの最初の考え

児童A：国産だけだと足りないから、輸入を続けていくほうがよい。 児童B：輸入は農薬が心配だから、国産のほうがよい。
--

そして、自分の考えの根拠、理由となるものを追っていきながら、このテーマについての考えを深めていった。

調べ始めたのはまず図書資料である。学校図書館については児童に探させたが、町の図書館についてはあらかじめ関連する本のみを学校へ取り寄せた。こんな学習でこんなことをねらって調べたいとお願いすると、町の図書館の担当の方が学校まで本を持ってきてくださるので大変便利である。今回は20冊ほど利用した。

ここで日本の食料自給率を調べていくと、諸外国の自給率も分かってきた。日本の自給率は約40%ほどなのに、イギリス、ドイツでは80%前後、オーストラリアに至っては200%近い数字だったのである。これには、児童もとても驚いていた。「日本は全然足りない」「どうしてこんなに差があるのか」「200%とはどういうことなんだろう」などの感想が出された。

農薬については、ポストハーベストという言葉が出てきた。収穫後に農薬を散布することだが、「びっくりした」「そういう食料を食べて大丈夫なんだろうか」という声があがった。それまで中国の問題は新聞やニュースなどで耳にしている児童もいたが、アメリカにもそういった心配があるということを知った児童もいた。

また、食料について一番身近な存在である家族(主に母親)に話を聞いてみる児童もいた。「安全で安心だから国産がいい」「国産がいいけど値段が高い」「外国にしかないものもある」などの意見が聞かれた。児童だけでは気付かなかった値段や、外国にしかないという種類のものもあるという視点に気が付くことができた。

本校には、今年度より栄養教諭が籍を置いている。日ごろから給食を一緒に食べたり、家庭科では食にかかわる授業をしたりしている。給食センターで献立に携わっている食のプロだけに、「栄養教

論の先生はどんなことに注意して給食を考えているのか聞いてみたい」との意見が児童から出され、話を聞く機会を設けた。栄養教諭は、毎日食べる給食の献立を考えているので、材料の発注にかかわる部分や、その関係者にしか分からない話をたくさん聞くことができた。

- ・なるべく国産のもの、しかも地元のもののできるだけ使うようにしている。
- ・市販されているものでも添加物の少ないものを選んでいく。
- ・ただし、予算が限られているので、輸入品を使うこともある。
- ・最近いろいろな食材が値上がりしたが、唯一お米だけ値段が下がった。それはあまり消費されないで余っているためだ。



栄養教諭に話を聞く

このような栄養教諭の話聞き、児童からは、「足りないから食料を輸入するだけではなくて、値段が安いから輸入したものが使われるんだ」「国産といっても、北海道のものを使おうとすると、愛知県まで運ばないといけないんだ」「農薬の他にも添加物というものがある。大丈夫なんだろうか」というような感想が出された。給食は国産のものがほとんどだと思っていた児童が多かったが、輸入したものもいろいろある、という話にも興味深く聞くことができた。児童A、Bは次のような感想を書いた。(資料6)

資料6 栄養教諭の話聞いての感想

児童A：給食は体のことを考えて国産のものを使っていると思いましたが、輸入のものは国産のものより安いので、使うこともあると初めて知りました。

児童B：地元のもの給食に出ることは知っていましたが、国産だと北海道から沖縄までのもがあるんだということが分かりました。

栄養教諭の話聞いた児童たちは、さらに、食料を売るお店ではどうなっているのだろうかと関心をもった。そこで児童もよく訪れる地元のスーパーの店長さんに聞いてみることにした。これは、国語科「話の組み立てや言葉づかいを考えてたずねよう」での学習を活用した。単元の目標である「目的や内容を明確にして、丁寧な言葉遣いでインタビューする」「話し手の答えを予想しながら話の内容を聞こうとする」に最適の活動である。

まず、クラス全体で店長さんにどんなことを聞きたいか話し合った。「給食と同じように国産のものと輸入のものではどちらが多いのか」といった売られている食料品について、また「これからの食料輸入はどうなっていくとよいと思うか」といった店長さん自身の考えについてなどをインタビューすることにした。

次に、質問に対する回答の予想を考え、グループごとに聞き手、話し手を交替しながらインタビューの練習をした。その後、代表児童の4人で店長さんを訪ねた。(資料7)



店長へのインタビュー

この活動で児童Bは率先してインタビューする係に立候補した。当日も、店長さんの答えに対しその場で質問するなど、意欲的に食料の問題について考えることができた。

資料7 店長さんとのやりとり

Q：主な質問（予想した答え） A：店長さんの答え

- Q：お店の食料品は、輸入品と国産品とどちらが多いですか。
（国産ばかりだと足りないから半分ずつぐらい）
- A：国産のほうが多いと思います。
- Q：輸入品と国産のものではどちらがいいですか。
（農薬などの心配が少ないから国産のもの）
- A：なかなか簡単には言えないがやっぱりおいしい気がするから国産のほうが良いと思います。
- Q：どうして輸入品を扱うのですか。
（値段が安いから）
- A：値段が安くてお客さんに喜ばれるから。また外国にしかないものもあるから。
- Q：これからの食料輸入についてどう思いますか。
（なるべく国産のものだけになっていくといい）
- A：国産のものをできるだけ増やしていきたい。でも自給率を高めていくには農業や漁業に携わる人が必要。皆さんは、田や畑で働きたいですか。私の店では、近い将来畑をつくることを考えている。みなさんが手伝いに来てくれたらうれしいです。

後日、代表児童は学級で報告をした。「お店で売られている野菜は国産のものが多い」、反対に「果物は外国のいろいろな種類のものがある」、「店長さんはできれば国産のものを売りたい」、「でもお客さんのことを考えると値段が安いから輸入品も扱っていく」、「将来は国産のものを増やしていきたいが、ただそう思っているだけではだめで国産のものをつくる人が必要だ」等、お店の商品の様子の写真や店長さんの思いの込められたインタビュー内容を基に紹介した。店長さんが、近いうちに自分たちの田や畑で作った食料を売っていきたくて考えていることが、特に児童たちは印象に残ったようだった。児童たちは、「国産、輸入のどちらにもいいところ、よくないところがあり、単純に輸入を増やしていくのか、国産がいいのかという考えでは答えは出ないのではないかと考えるようになった。（資料8）児童Aは「どちらがいいのか考えるのは難しい」と表現した。児童Bは、「国産のものをつくって増やしていくことは大事だと思うが、田や畑で働く人は少ない」との矛盾を感想に書いた。

資料8 インタビューを聞いての感想

児童Aの感想

国産のほうが良いと思うけど、外国にしかないものあって、店長さんはそうばかりも言っていられないのかなあと思いました。どちらが良いのか考えるのはむずかしいなあと思いました。

児童Bの感想

いくら国産のほうが良いと思っても、思っているだけではだめなんだなあとということが分かりました。国産のものをつくるのも大事だけど、田んぼや畑で働くよりも、やっぱり会社に行く人のほうが多いのかなあと思いました。

イ 話し合う準備をする

ここで輸入派と国産派に分かれ、その中でそれぞれグループをつくり、なぜそう考えるのか話し合った。児童のこれまでの学習の様子等から考え、グループは教師が設定し、話しやすくするために人数は4～5人とした。このグループで、全体で話し合う際の主張の内容の検討や資料の準備をした。意見を発表するときには理由を言うようにし、また資料を提示しやすくするためプロジェクタを使うことにした。

ウ 全体で話し合う

話し合いの場は「河和小議会」とし、司会は児童に担当させた。まず、国産派の意見発表、次に輸入派の意見発表、そしてそれぞれへの反論・質問という順で進めた。国産のほうがよいという主な理由は、農薬などの面で安心できる（中国での餃子問題の報道より）、味がおいしい（店長さんの話や家族の話より）、運ぶのは国内だけだからCO₂も少ない（栄養教諭の話より）というものだった。輸入のほうがよいという主な理由は、値段が安い（店長さんの話や家族の話より）、国内のものだけでは足りない（自給率のグラフより）、現在の生活では輸入品なしでは成り立たない（店の輸入フルーツの写真より）というものだった。それに対する反論・質問含めて話し合いの一部は次のように進んだ。（資料9）



発表前に打合せ

資料9 食料問題についての話し合いの様子

C1：グラフから分かるように、国内の小麦だけでは足りないから、輸入を続けたほうが良いと思います。

C2：でもやっぱり国産のものの方がいいです。農薬が心配だからです。

C3：小麦の自給率は0.1ぐらいです。国産のものだけでは全然足りないから、輸入も必要だと思います。

C4：自給率を高くしていけばいいと思います。

C5：どうやって高くしていくんですか。

C6：店長さんも言っていたように若い人たちが農業をやっているようにするといいと思います。

C7：でもグラフを見ると農家の数は減っています。農業は仕事の中身が大変だからだと思います。

C8：仕事が楽になるように、休みを増やせばいいと思います。



議会前のあいさつ

C1やC3は、グラフを基にして考えて発表している。C4は、単に国産の方がよいというだけでなく、国産を維持していくためには自給率を高くしていかなければならないと考えている。そのためにどうしていくといいか、C6とC7は現状を話や資料からとらえ、それを基に考えようとしている。

このように、お互いに意見を聞きながら自分の主張を振り返り、話し合いを通じて考えを深めていくことができた。話し合った後、児童の考えは輸入派14人→11人、国産派20人→13人、そしてどちらも必要なのではないかと共存派が新たに10人となった。自分だけで考えていた段階では「このまま輸入を続けていくほうがよい」か「国産に頼っていくほうがよい」という、どちらかを選ぶだけであつたが、資料を調べ、他の人の意見を聞き、話し合いに取り組んだことで、単にどちらがよいという問題ではないのだという考えの児童が増えてきた。また、それぞれの立場を主張するにも、やはり問題点があり、考えていかなければならないこともあるという意見が多く出された。これらのことから、様々な資料を読み、他の人の意見を参考にし、話し合いを通していく中で、自分の考えが深められていったと言える。児童Aは最初の国産派のままであつたが、児童Bは話し合い後、輸入派から共存派へと変わった。

(3) 自分の考えを分かりやすく表現する

(国語科「調べたことを整理して書こう」)

ア レポートの書き方を学ぶ

社会科での学習を国語科「調べたことを整理して書こう」での学習に生かすため、まずはレポートの書き方を学習した。単元の目標「調査・研究した事柄とそれに基づいて考えたことを、レポートの構成を考えながらまとめる」に沿って、自分の主張やその理由を明らかにしながら、考えを表現していくことを確認した。

単に調べたことだけでなく、インタビューで聞いた話や話し合った事柄も内容として取り入れることができるため、様々な考えを参考にすることができる。また、グラフや図などの資料も利用しながら、自分の考えを分かりやすく表現していくことを学ばせた。

イ レポートを書く

国産派の児童は、「やっぱり体に安全、安心なものを食べたい」「アメリカから1500億円ほど大豆を輸入しているが、もし輸入できなくなったら困るから自給率を上げていったほうがよい」「米作りは機械化が進み、農家の数の減り方に比べて、生産量はそんなに減っていない」「フードマイレージという言葉がある。みんなが環境のことを考えると、少しぐらいは高くても、体にいいものを食べるのではないか」などの考えをまとめた。輸入派の児童は、「食生活が洋風に変わってきた。なくてはこまるから、足りない分はやっぱり輸入するしかない」「自給率は40年ぐらいでどんどん下がってきた。上げていくのは難しい」といった意見をまとめた。また、共存派の児童は、「足りないから輸入するしかない」「輸入が増えているのはよくない」「国産のものを増やすために、国産のものを食べていくことが大切」「給食のご飯も残ると量が減っていくので、みんなで食べたい」などの考えをまとめた。

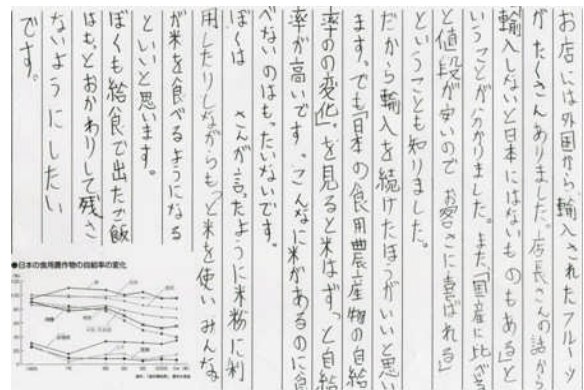
このように、自分の主張に対しての理由はほぼ全員の児童が書くことができた。また話合いを通じて、「〇〇さんが言っていたように、わたしも農家の人の休みを増やすといいと思います」とか、「〇〇さんは農家の人の給料を上げるといいと言ったけど、ぼくは米が売れないと給料は上がらないと思います」など、友達の考えと比べながら自分の考えを表現することができた。さらに、根拠となる具体的な資料や、資料から読み取った数値を入れて考えを表す児童もおり、分かりやすく表現するということを意識したレポートを書くことができた。(資料10)



レポート作成

資料10 児童のレポートの一部

④自分の主張
私は国産の方がいいと思います。
③主張の理由
国産の方がいい理由は、食がたもらつたことに安心して食がたもらえつからです。それに、いろいろな事件があつて輸入した外国のもの少なくて買えない人がいるから。
今は日本の自給率がほかの国にくらぶとずっと低い。日本は外国にすくたよっています。このまま輸入にたよっているとその国とケンカしたときに日本がこまアしてしまう。ほかの国も安く輸入できるところに集まると、たかさんの国でとりあひなってしまう。もしこうなるときにも食がたるものが無くなってしまうから、そついつこがかわるまでに自給りつをあげたいほうがいいと思います。



児童Aのレポート

(国産のほうがいいので) やっぱり自給率を高めていきたいです。でも「農家の数の変化」のグラフを見ると、農家の数はどんどん減っています。

〇〇の店長さんが言うように、「農業をする人が増える」ようにしたいです。だけど自分はまだできません。だから少しでも国産のものを使って国産のもの消費を増やしていきたいです。・(中略) また〇〇先生(栄養教諭)が言っていたように「地元でとれたものを地元で使っていく」ことも大事だと思います。地産地消というそうです。

食料を運ぶ距離が短くなってCO₂の量も減り、環境にもいいということ。消費する量が増えて自給率が高くなることにつながるだけではなく、地元のものを食べることで環境もよくなることにつながるなんて、すごいと思いました。

児童Bのレポート

お店には外国から輸入されたフルーツがたくさんありました。店長さんの話から「輸入しないと日本にはないものもある」ということが分かりました。また、「国産に比べると値段が安いのでお客さんに喜ばれる」ということも知りました。だから輸入を続けたほうがいいと思います。

でも「日本の食用農産物の自給率の変化」を見ると、米はずっと自給率が高いです。こんなに米があるのに食べないのはもったいないです。

ぼくは〇〇さんが言ったように、米粉に利用したりしながらもつと米を使い、みんなが米を食べるようになると思います。ぼくも給食で出たご飯は、もつとおかわりをして残さないようにしたいです。

ウ レポートを紹介し合う

書いたレポートは、まず自分で読み直した後、グループ内で交換して更に読み合った。その時、読んだ感想も書かせた。お互いに見合うことにより、より客観的にレポートを読むことができた。「グラフがあると数字などの意味が分かりやすくなるなと思いました」「数字が出てくると、資料のどこにあるかよく見ようと思いました」「輸入がいいという同じ考えを書くのにも、いろいろな理由やいろいろな見方があるんだなあと思いました」とそれぞれ感想を書いた。

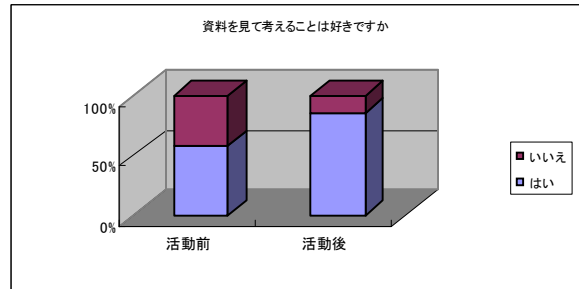
4 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究の成果

資料の読み取りはまずグラフから始めた。今回は、教科書に記載されている様々なグラフをスタートに全員で確認することから始めた。資料を読み取るときの基本(①～③)を押さえたことで、その後の学習がスムーズに進んだ。全体で資料を読んだ後は、児童個人で資料を探し、読んだ。グラフにとらわれず、表、地図、写真、絵などいろいろな種類の資料に触れ、資料を読むことに慣れることが

できた。児童に聞いたところ、学習前には「資料を読んで考えることは好き」と答えた児童は58%だったが、学習後は85%に増えた。(資料11) その理由として、「資料はグラフだけでなく、写真などもあることが分かったから」「社会のグラフをどう見るといいかが分かってきたから」「いろいろな資料があって面白かったから」などと答えた。

資料11 児童のアンケート結果 1



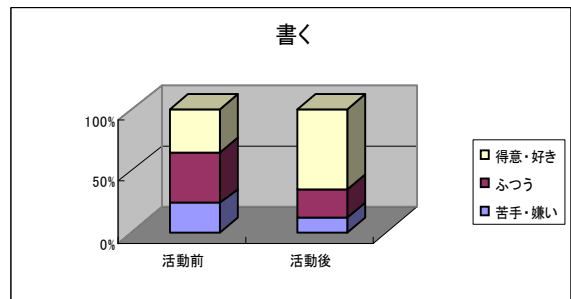
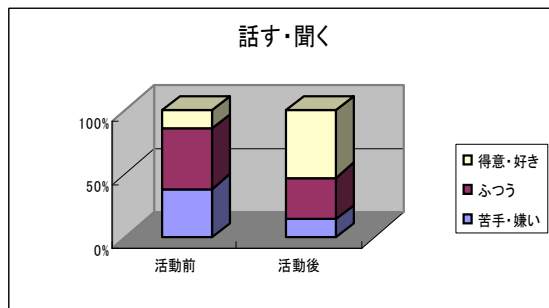
また、話し合いの中でも資料を基にして、いろいろな角度から食料問題をとらえていくことができた。話し合いは、まずグループで考えを出し合ったが、少人数にしたので、全体では意見をなかなか出せない児童も話し合いに参加する姿が見られた。それまでに自分で調べた資料があったり、また同じ考えの児童でグループをつくったりしたので、意見を出しやすかったように思う。その後の全体の話し合いの場でも、グループで相談しながら意見を発表する様子が見られ、全体での話し合い、グループでの話し合いを通じて自分の考えを深めていくことができたと思う。児童からも「議会での話し合いは楽しかった。またやりたい」「同じ内容でも違う言い方があったことが分かった」「いろいろな考えを聞くことができてよかった」「自分と全然違う考え方もあって驚いたけど面白かった」などの意見が多く出された。

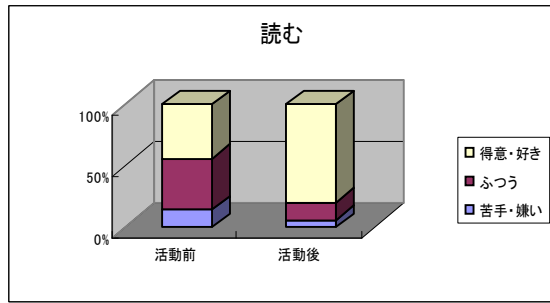
その結果、最後にレポートを書いて考えを表現する段階では、ほとんどの児童が自分の考えに対して理由を書くことができた。その基となるものは、調べた資料、聞いた話、話し合ったことであり、これまでの学習を生かした内容であった。また、具体的なグラフや表、あるいは読み取った数値を取り入れた児童も半数を超え、工夫して自分の考えを分かりやすく伝えることができた。

今回は、国語科と社会科を連携して取り組んだが、その成果として主に次の3点が挙げられる。国語科でレポートを書く際、その題材に社会科の学習をそのまま生かすことができた。また国語科で学習するインタビューを社会科で実際に行うこともできた。さらに社会科ではグラフや図、写真といった資料を数多く扱う。そうした資料を国語科でレポートを書く活動に生かすことができた。このように教科連携をすることで、双方の単元内容を無理なく生かしながら、資料を読んで理解し、自分の考えを深め、分かりやすく表現するという読解力を育てる有効な取組となった。

学習前にはどんな活動が得意(好き)か、学習後には自分はどんな活動が得意(好き)になったかという児童へのアンケートは次のような結果であった。(資料12)

資料12 児童のアンケート結果 2





話す・聞く、書く、読むというすべての活動において学習後、得意・好きになったという児童が増えた。児童本人の主観ではあるが、学習を通して力が付いてきたことを、児童たちも実感しているといえる。

学習後のアンケートで児童Aは、話したり聞いたりすることが前より好きになったと答えた。理由としては、「みんなのいろいろな意見が出て

楽しいし、分からないことが分かるようになったから」と書いていた。また、あまり自分の考えを話すことに意欲的ではなかった児童Bは、話すことが前に比べて好きになったと答えた。その理由として、「議会で話したり聞いたりする話合いが面白く役に立ったから。またやりたい」と書いた。関心をもって意欲的に取り組むことは、読解力向上のための大切な要因の一つであると考えられる。

(2) 今後の課題

手探り状態での実践だったが、見えてきた課題としては、次の点が挙げられる。

- ・単発で取り組んでもなかなか読解力は身に付かない。日々実践を重ね、考察しながら研究を重ねていく必要がある。
- ・各教科における読解力とは何かという押さえが何よりも大切である。
- ・それに伴い読解力の評価規準を考えていくことが大事である。
- ・既存のカリキュラムの中で効果的に読解力を高めたり、無理なく教科を連携させたりしながら読解力の向上を図る手だてを引き続き考えていく必要がある。

小学校では、平成21年度からの移行措置期間を経て、平成23年度から、新学習指導要領が本格的に施行される。「生きる力」が掲げられていることに変わりはなく、この「生きる力」をはぐくむための大きな要素の一つが読解力であると思う。読解力の向上を目指して今後も取り組んでいかなければならない。